

3・11の記憶を絵に残す

中塚 美恵子*

3・11地震発生のとき

2011年3月11日、外出先から自宅（愛国東1）に戻ってまもなく地震が来ました。ずいぶん長い。それが奇妙に感じました。本当に不気味で、不安な時間でした。この夜、知人の家族に不幸があり、通夜へ行くため17時頃、自宅を出ました。津波警報が出ていましたが、それほどものではないと思っていました。最寄りの貝塚大橋を渡ろうとしましたが、通行止めだったので上流の雪裡橋へ向かうと今度は渋滞していました。通常なら15分程度なのが一時間かかって、ようやく葬儀場に着きました。今思えば、大変な時に外出したと思います。



周辺地図

自宅前の冠水

通夜が済み、帰宅したところ自宅前が冠水していました。深いところで30cmほどあったかと思えます。近所の人たちが集まって話していたので聞いてみると、排水溝から水があふれ出て噴き上げてきたとのことでした。なんでも、60cmくらいの高さまで噴き上がったとのこと、水は数百m離れた場所まで流れていったそうです。そして、1カ所だけではなく、何カ所から噴き上げていたと話していました。

この様子を見て、一度避難所から戻られた人たちが再び避難所の光陽小学校へ向かったそうです。

自分もその排水溝へ行ってみると、本当にまた噴き上がってきました。

また、自宅の北側方向にはアセツリ川が流れています。川の様子を見に行った人が、普段見たことのない

水量を目にして、「堤防がなかったら大変なことになっていた」と話していました。この川は高低差がほとんどなく、普段から満潮になると釧路川の水が逆流して来るので、この時も逆流して来たと思いました。

そんな状況でしたので、ひと晩中寝られませんでした。



3月11日、堤防わきの排水溝から噴き上げた水は、住宅街の小路にも入っていった

* 釧路市立博物館友会の会

木材に目を奪われる

翌日、あらためて東北地方の津波のようすをテレビや新聞で見ました。「衝撃」のひとつと言しかありませんでした。自宅前の冠水も収まっていたので、それへの関心はもう吹っ飛んでしまいました。

午後にアセツリ川のようなようすを見に行きました。すると、木材がごろごろしています。「大変なことになっている」「これは知らせなくてはならない」という勘が働きました。カメラを片手に、夫と町内会長と川のまわりを歩き回りました。1967年から住んでいますが、こんなことはもちろん初めてです。そして北海道新聞と釧路新聞に電話して、この様子を伝えました。東北の津波と比べると、自宅前の冠水の話はささいなことだと思って、市役所には連絡しませんでした。

木材は4カ所、計33本ありました。一本橋のように、川の両岸にまたがっているものもあります。どうやら、津波によって釧路川沿いにある貯木場から釧路川に流れ出て、下流で合流しているアセツリ川へ流れ込み、その後、水が引いたために取り残された結果のようでした。これは記録に残さなければと思い、撮影やスケッチを始めたのでした。写真は手元に置いたほか、町内会長へも渡しました。材木の長さや直径も、歩測や見当で記

録しました。

後から、ゴトンゴトンと材木が橋にぶつかった音がしていたという人の話も聞きました。

川の両側には樋門設置されています。北側が釧路町、南側が釧路市の管理となっており、普段は開けられていました。この時、釧路町側はすべて閉じられていました。対照的に釧路市側は開いていました。釧路市側の門の外側には水が流れた跡が残されており、大量のヘドロが排出されていました。津波が流れ込んだ痕跡です。

平坦な地域、アセツリ川は海の干満で水が行ったり来たり。以前から「この地域は水で命を失う可能性がある」と感じていたので、今回も無意識のうちに川に目が向いたのだと思います。

博物館との関わりが

この間、ようすを見に来る人を見かけることはありませんでした。出来事は常に記録として残さないと、人の心から薄れていくものです。自分のためだけではなく、地域の問題として残そうと思いました。

博物館友の会の会員としていろいろな形で博物館と接して、常々記録に残すということを学んで来たため、そういう意識が私にはありました。地



散乱した木材の塊のうち一カ所、津波のあと水がひいたため取り残された木材たち

域の記録は、地域が主体となって残す。記録の成果は地域で広げ、そして後世に伝えることも博物館の重要な役割かと思えます。

実際、機会を見つけてこの木材のようすを話に出したり、撮った写真を見せたりしても、あまりにも知らない人が多かったです。

絵筆を握って

以後、何度か様子を見に行くとともに、スケッチをしました。スケッチをしながら、「これは絵にしよう」と思いました。しかし今回は「絵」としてではなく、「記録」として描こうと思ったのです。描き始めてから一週間ほどで完成。さらにもう一枚描こうと、また一週間あまり筆を握りました。

普段、絵を描く時は、これを入れたらなあと思って絵の完成度を上げるために「加える」ことがあります。しかし今回は「記録」です。「加える」ことで作ったものにしたくないという思いと葛藤しながら、筆を握り続けました。残された木材には傷がつき、木の肌はあたかも皮膚がむけているような状態を記録しました。

そして付けたタイトルが「3・11」。アセツリ川の状況を一人でも多くの人々に知ってもら

うのが一番です。自分たちの身を守るきっかけにして欲しいという思いを絵に込めました。今、このようすを描けと言われても、同じ絵は描けません。

これから

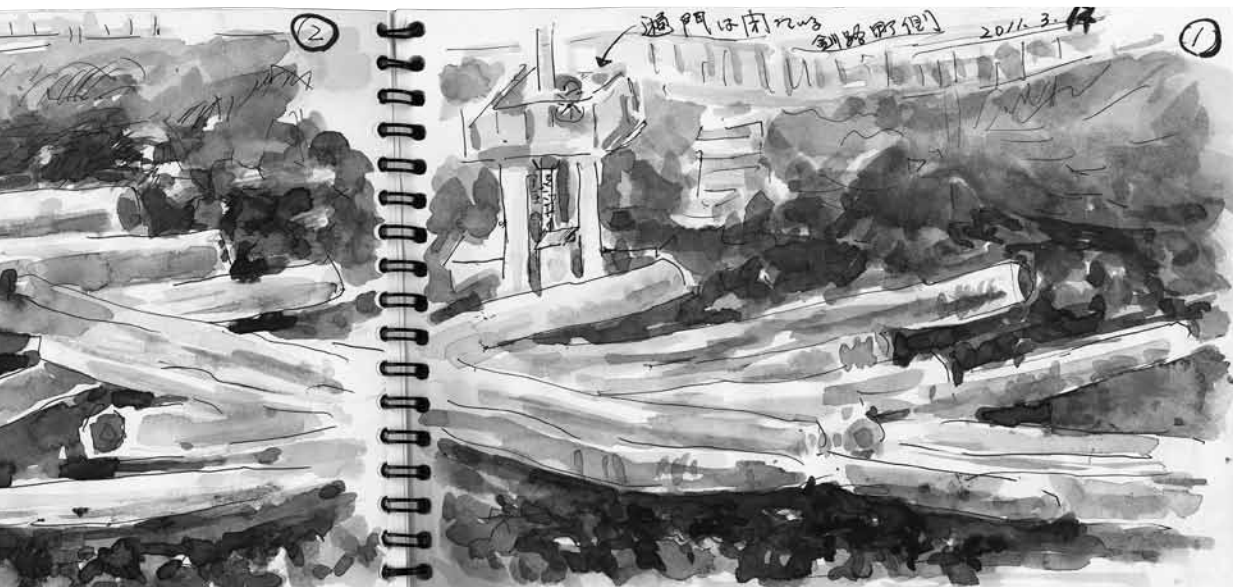
アセツリ川は、普段は散歩する人が僅かにいるくらいで、地域からこの川の実在は忘れられています。地域のへの無関心は、防災意識の低下にもつながると思います。

これからも、この絵は地域を知ること、そして防災に生かしていきたいと思っています。今回の震災での地元・釧路の被災情報はあまり知られていないと感じています。そして、皆さんがいろいろな形で記録されている情報を集められたらと思います。また、行政ばかりに頼るのではなく、自分たちも行動しなければならないと思います。

東北地方と比べると釧路は小難に済んだようですが、こうやって記録を残しておこうと歩いてみると、普段は気にもしなかった大切なことをいくつも見つけました。ご自分の住む地域のことを知っておくことは、とても大事のように思いました。

つたない記録絵ですが、何かの参考になるようでしたらうれしいです。

文中の地図は、国土地理院の電子国土Webシステムから配信されたものを使用した



川に流れ込んだ木材 端から端まで歩いてみると、98歩（約71メートル）もありました